

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
恵深主 爾高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降三日葬受
われらをくるしみよりときたまえり、
我等苦 釋給
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我生命復活主 光
えいはなんぢにきす。
榮 爾 歸す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
いつもよよに、アミン。
何時 世 世
しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等 同 座 者 忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 なるハリストスのえきしゃ、せい
なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我國光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照者亞使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢの し んにも 。
 爾 神

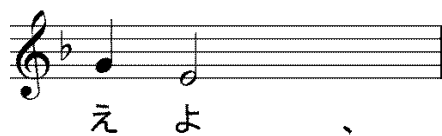
司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つく の
 主 爾 等 神 誓 作 償
 え よ 、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つく の
 主 爾 等 神 誓 作 償



誦經) ^{しゅなんぢら}主 ^{かみ}爾 等の神に



【 使徒經 (アポストロス) 182 半端 コリント後書 6 章 16~7 章 1 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒 ^{じん たつ}パウエルが ^{こうしょ}コリント人 ^{よみ}に達する後書 ^{よみ}の讀、

司祭) ^{つつし}謹 ^きみて聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{なんぢら}爾 等は ^{かみ}活ける神の殿なり、^{かみ}神の嘗て ^{かつ}言いしが ^い如し、^{ごと}曰く、^{いわ}我 ^{われ}彼等 ^{かれら}の中に ^{うち}居り、

^{かれら}彼等 ^{うち}の中 ^ゆに行かん、^{われ}我 ^{かれら}彼等 ^{かみ}の神 ^{かみ}となり、^{かれら}彼等 ^{われ}我 ^{たみ}の民 ^{しゅ}とならん。主 ^{また}又 ^{いわ}曰く、^{ゆえ}故に ^{なんぢら}爾 等は ^{かれ}彼

^ら等 ^{うち}の中 ^いより ^{みづか}出でて、^{はな}自 ^{けがれ}ら ^ふ離れよ、^{なか}汚穢 ^{しか}に ^{われ}觸る ^{なんぢら}る ^い勿れ、^{われ}然 ^{なんぢら}らば ^{ちち}我 ^{ちち}爾 等を ^{ちち}納れん、^{ちち}我 ^{ちち}爾 等の ^{ちち}父

^{なんぢら}となり、^{われ}爾 等 ^{しちよ}我 ^{しゅ}の ^{ぜん}子 ^{のう}女 ^{しや}と ^{これ}とならん、^い主 ^こ全 ^{ゆえ}能 ^し者 ^あ之 ^いを ^{もの}言 ^{われ}う。是 ^{らす}の ^か故 ^かに ^か至 ^か愛 ^かの ^か者 ^かよ、^か我 ^か等 ^か既 ^かに ^か此 ^かく

^{ごと}の ^き如 ^きき ^{やく}許 ^え約 ^えを ^お得 ^おた ^{にく}れば、^{しん}己 ^{けがれ}を ^い凡 ^いの ^き肉 ^いと ^き神 ^いと ^きの ^き汚 ^きより ^き潔 ^きく ^きし、^{かみ}神 ^おを ^お畏 ^おる ^おる ^おを ^お以 ^おて ^お聖 ^おを

^な成 ^なす ^なべ ^なし。

(比較用 口語訳)

わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか。

司祭) ^{なんぢ}爾 ^{へいあん}に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) ^{さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ} 讃揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

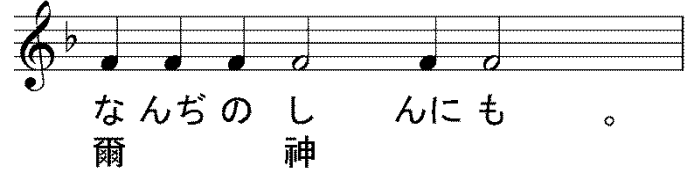
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 26 端 6 章 31~36 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、

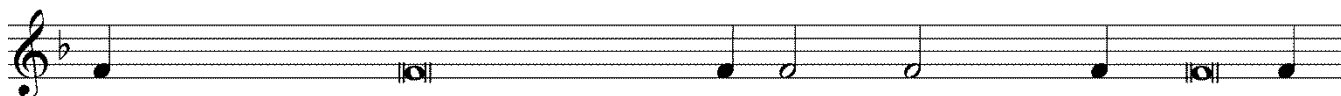


司祭) 謹みて聴くべし、主曰えり、人の爾等に行わんを欲する事は、爾等も是くの如く

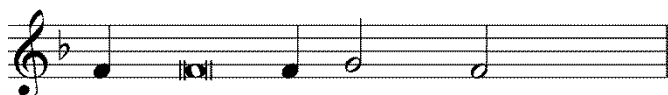
これひと おこな なんぢらも なんぢら あい もの あい なんぢら なん かんしゃ
之を人に行え。爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、
けだしぎいにんら かれら あい もの あい も なんぢら ぜん おこな もの ぜん おこな なんぢ
蓋罪人等も彼等を愛する者を愛す。若し爾等に善を行う者に善を行わば、爾
等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も是くの如き事を行う。若し返さる望ある者に
か なんぢら なん かんしゃ けだしぎいにんら すう ごと かせ ため ぎいにんら か
借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借す
なり。然れども爾等敵を愛し、何を望まずして善を行い、又借し與えよ、則爾
ら むくい おお なんぢらしじょうしゃ こ な けだしかれ おん そむ ものおよ あ もの
等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋彼は恩に負く者及び悪しき者に
じあい ほどこ ゆえ なんぢらじれん なんぢら ちち じれん ごと
慈愛を施す。故に爾等慈憐なること、爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、それくらいの事はしている。また返してもらつつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがた

はいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。
あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸